

12月26日 マタイによる福音書2章1～12節 今日の説教から
説教題：「東方の博士たち」

クリスマスについて一番詳しいキリスト教の立場として、「超常的な存在であるサンタクロース」という存在について、特に子どもたちに説明することはとても難しいです。子どもたちの夢を壊すのは忍びないのですが、「いい子にしないとプレゼントがもらえないよ」と、まるでなまはげのように使われるサンタクロースに対して違和感をもってしまうものです。今はとりあえず「最初のサンタクロースはイエス様のことをとっても大切にしていた人なんだよ」という形でかつて存在した「聖ニコラウス」という聖人の逸話を語ることにしています。

「貧しい子どもに金貨を惠んだ逸話」と、「殺された子どもを生き返らせた逸話」によって、聖ニコラウスは「子どもに贈り物をする」存在として知られるようになりました。私たちが想像するような存在としてサンタクロースが理解されているのはそのような背景があり、それと同時にクリスマスとプレゼントが結びついたのは、やはり今日の聖書箇所において東方の博士たちが持ってきた「黄金・乳香・没薬」が大きく関係しています。

三人の博士たちが持ってきた贈り物はどれも高価なものであり、「王様に対する捧げもの」として贈り物を持ってきたことが理解できます。そのため、それぞれの贈り物に対して特別の意味を見出することは、解釈として間違っているのかもしれません。ただ、その贈り物はどれも意味深なものばかりです。一人目の博士が持ってきた黄金は、「永遠の輝き」の代名詞でもあります。黄金は鑄びることなく、常にその輝きが保たれます。だからこそ黄金の贈り物によって、新しい王様となるイエス様の栄光が永遠に保たれることが示されている、と受け取ることも出来るでしょう。同じように、聖書の中で乳香は「神様に対する捧げもの」として理解されており、イエス様の誕生が「神様が人間としてこの世に生まれた」ことを示唆しています。そして、没薬はあまり聖書の中では出てこないのですが「ミイラの原料」として用いられるものです。死体の防腐剤として用いられることから、「死者に対する捧げもの」と理解してもいいでしょう。イエス様の歩みはやがて人々の罪を負い、「神の子」として死ぬ十字架へと進んでいきます。そのためにこの世に遣わされた受難の運命が定められていたからこそ、ここでイエス様に対して没薬が贈られたのでしょう。

これらの贈り物によって、イエス様は人々を導く王として、救いへと導くメシアとしての誕生が祝われていたのです。私たちも、クリスマスの出来事によって多くの「贈り物」を受けることが出来ています。イエス様の誕生によって、私たちは神様に愛されていることを知り、私たちの隣人もまた神様に愛されている存在であることを知ることができました。私たちが受けたその喜びは、兄弟姉妹と、隣人たちと共に分かち合うことが出来る「贈り物」なのです。私たちが多くの恵みを頂いている、その感謝を胸に、そしてこの一年も神様に守られたことへの感謝と共に、今週一週間の、これから歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：マタイによる福音書2章1～12節

・1:イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになつた方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに來たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになってい るのかと問い合わせました。彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。『ユダの地、ベツレヘムよ、／お前はユダの指導者たちの中で／決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、／わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。

・9:彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。